



「パリ大全」

×月×日
『マルクスの三つの顔』でもしばしばベンヤミンが召喚されていたが、エリック・アザン『パリ大全 パリを創った人々・パリが創った人々』（杉村昌昭訳 以文社 4500円＋税）も、メルシエ、バルザック、ボードレールそしてベンヤミンという「パリのフラヌール（遊歩者）」の系譜につらなるパリ・ガイド。ただ、類書と大きく違っているのは、いまどき珍しい筋金入りの左翼の手になる本だということ。それもそのはず、アザンはその名前の示す通りエジプト系とパレスチナ系移民の子としてパリに生まれ、アルジェリア戦争でFLNに与して以来、一貫し

を「寄宿舎ラヴェール」(P.106)とするなど、いくつか気になる訳語が目についた。

て左翼の立場を貫き、「ラ・ファブリック」という左翼系出版社を立ち上げたばかりか、自らも民衆史の立場に立って執筆を開始したという根っからの革命派なのである。よって、サンジエールマン・ドゥブルエが出版社と古書店の街からモードの街へと変貌したことについても徹底的に否定的なのだ。「本の世界だけがこの地区から追い出された唯一のものではない。サンジェルマン広場を見ると、五つの腫瘍——ディオール、ヴィトン、アルマーニ、ランヴァン、カルチエ——が都市の襞のなかに浸透したことがわかる」。怨念に満ちた民衆派のパリ案内である。とくに「赤いパリ」と題した第二部は七月革命から二月革命を経てパリ・コミューン、そしてレジスタンスに至る「パリケードのパリ」の歴史で、『レ・ミゼラブル』や『感情教育』の武装蜂起場面に興味を抱いた読者には必読の文献となるだろう。訳文はこなれて読みやすいが「Le cours」を「中庭」としたり(P.26)「pension Laveur